



わたしの聖戦^{ジハド}

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

120

健康情報と医療の限界

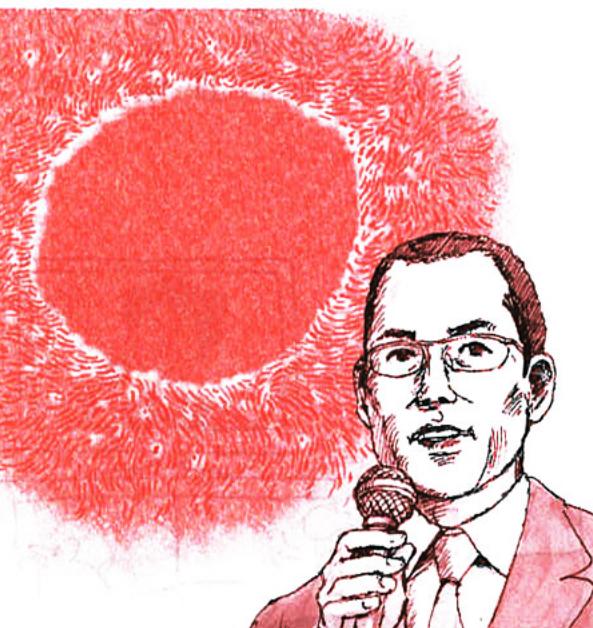
「〇〇を飲むとがん予防になる」とか「〇〇な人は糖尿病になりやすい」などといった健康情報の出どころは、「疫学」という学問における研究結果の一端である。疫学の研究方法はいろいろだが、よく知られているのはケース・コントロールスタディで、例えは肺がんに罹った患者グループと罹っていないグループを設定し、それぞれのライフスタイルを調べてその違いに着目した上で、何が肺がんの原因となつたのかを探ろうとする方法である。

原因といつても、それらは「リスク」という名の統計学的結果に過ぎないと思つて落胆

するか半分も可能性があると希望を抱くか、というのに似ている。

つまり、病気の予防や治療には絶対に確実なことはないと思っていい。どんな薬も、効く人は効くし効かない人は効かない。心もとないが、その

い。したがつて、絶対的なものではないし、何よりも個人にとつて決め手となる情報を導き出すことはできない。ある種の抗がん剤治療を行うことによつて再発を〇〇%予防できる、という表現は、その治療を受けたときの再発予防の可能性を数字で示しただけで、治療を受けるかどうかの選択を迫られている患者やその家族にとつては甚だ頼りない表現としか映らない。



程度のものだととらえたほうが気がラクである。それでも病気になつたから諦めたほうがいいのか、と聞かれればそんなことはない。基本的には人間は生への欲求から逃れられない。いつ死んでもいい、と口にする人でも、いざ

病気を敵と思うか、我が身の一部とともに見えるか、考え方によつても医療と向き合う姿勢は変わつてくるだろう。西洋医学が病気を敵とみなして徹底的に叩き潰そうとするのに対し、アーユルヴェーダや中国医学はみずから免疫力を高めるこ

とによって症状を柔らげたり治療効果をアップさせようとする。西洋医学とそれ以外の医学を組み合わせてその人に合つた治療法をアレンジする考え方を統合医療と呼ぶが、発展は遅々として進まな

い。病に苦しむ人はまだ多いのが現実だ。

そんななか、どんな細胞にも変化できるiPS細胞の研究が評価され、京都大学の山中伸弥氏がノーベル医学賞を受賞し、日本中が歓喜に包まれた。とりわけ、難病に代表される治療法のない病気に苦しむ人にとっては何よりの朗報となつた。しかし一方で、課題も多く、実際にその恩恵にあずかるのはまだ先のことだろう。

「夢のような」の枕詞がつく技術には注意が必要である。どこかに必ず落とし穴がある。それもひつくるめての期待が大きいのだろうが、だからこそ慎重に、冷静に研究のゆくえを見守る必要があると思う。ノーベル賞はiPS細胞にとつてはゴールへの第一歩であり、本当の勝負はこれからである。

イラスト・伊藤栄章